

大東亜戦争

「高井田は戦場だった」

澤田 平

昭和十九年、二十年の終戦（敗戦）間際になると、アメリカ空軍の日本本土空襲が次第に激しくなり、爆弾や焼夷弾が頭上に落下してくる日々が日常となった。市中の学校は閉鎖され、出征母子家庭の母は勤労働員で不在であり、留守を守る小学四年の少年は、幼児を抱えて空襲下を逃げ惑った。逃げ込む防空壕もなく、屋内で幼い弟を胸の中に抱き込み、布団を頭からかぶってB29爆撃機の絨毯爆撃に耐え抜いた。周囲は焼け野原となり、不発焼夷弾の油脂の匂いがいつまでも残っていた。爆弾の落ちた跡は大きく大地をえぐり、湧き水が池のように満々と湛えられていた。

高井田は戦場だった

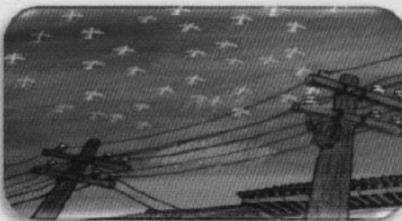
昭和二十年（一九四五）五月八日の深夜、室戸岬から日本上空に侵入飛来してきたB29爆撃機二機のうち、一機は徳島・淡路島・神戸の上空を経て大阪上空に達し、ここで地上からの高射砲の砲撃に被弾し、機体は上空で分解破裂して墜落した。時間は真夜中の十二時過ぎで、日付は五月九日になる。高射砲陣地は近場の巽村（たつみむら。現大阪市生野区）にあり、私は警報によって目覚めており探照灯に捉えられ、何時よりも低空飛行に見えたB29が火の塊になりやがてバラバラに落下する瞬間を大勢の大人たちと共にはつきりと見た。期せずして拍手が起こり、私も夢中で拍

手した。巽村の高射砲は一万メートルの高度を飛ぶ爆撃機には戦果を挙げ得ず、何時も失望していた。探照灯が夜空を照らす様子はまるで太い電柱が夜空を右往左往しているようで、壮観であった。

墜落したB29は大阪市の東部に隣接する、旧布施市の高井田（たかいだ）地区に散開して乗組員十名の遺体と共に落下していた。高井田は現在密集した市街地であるが、当時は田畑が広がり、機体や巨大な燃料タンク、プロペラやエンジンが散らばっていた。遺体は手足の千切れたものもあり、何日もそのまま放置さ



④ B-29撃墜物語



1945年5月9日午前0時半ごろ、偵察のため大阪上空に侵入した2機のB-29の内、1機が高射砲陣地から発射された砲弾にあたり、高井田付近の広い範囲にバラバラになって墜落しました。部品落下による住民の犠牲や搭乗員についての悲しい出来事が伝えられています。

← (地図・④の説明文)

ひがしおおさか
編集・発行

人権・平和まっぷ
東大阪市人権文化部
(二〇二〇年八月発行)

れていた。大阪はもちろん、兵庫・奈良・京都・三重・滋賀など近県からも大勢の見物客が弁当持参で終日押し寄せ、万博が国際見本市、まるでテーマパークの様相を呈していた。遺体の傍には憲兵隊員が太い青竹を警棒にして張り付き、時おり遺体を裏返したり、位置を移動させていた。見物人の中には

遺体を蹴ったり踏みつける者もあり、誰もそれを止める者は居なかった。その敵愾心は誰しも共有するもので、多くの人々は米機の無差別爆撃や、戦場で肉親や大切な人を失っていた。空の要塞と恐れられたB29の機体の大きさに圧倒され、まるでタンクローリートラックのような巨大な燃料タンクは厚いゴム板に覆われ、被弾しても燃料が漏れぬ工夫であると言う。タンクは数個あり、何に使うのか漏れた燃料を熱心に掬い上げて居る人が居た。

遺体は白人の若い男性であったが、美しく見えたのか、女性の隊員が多くいるとのうわさまで流れた。プロペラが付いたままのエンジンが人家に落ち、数人の死傷者があった。パラシュートで一人だけ脱出した乗員がおり、高井田から北方に2キロメートル以上離れた宝持（ほうじ）付近の路上に降下している。巡査が駆け付け、ピストルを構える三十一歳の米軍大尉に対して、小柄な老巡査が切れもしないサーベルを抜き放ち突進すると、大尉は両手を挙げて逮捕された。如何なる理由か、大尉は七月二十日に信太山練兵場に於いて、憲兵隊により処刑射殺されている。

私は高井田の墜落現場に毎日通い続け、戦争の悲惨さを目に焼け付けた。この事件に関係した憲兵隊員は戦後、軍事裁判で極刑に処されている。墜落現場の旧布施市高井田の田畑は連日見物人の雑踏にコンクリートのように踏み固められた。現在は東大阪市高井田となり、人口密集、建造物が建ち並び、昔日の姿を見るすべもない。

昭和十九年・二十年、大阪市内の学校は閉鎖され、多くの学童は集団疎開か親戚へ縁故疎開して大阪市内から脱出し、学業を続けた。出征母子家庭であり、母は勤労奉仕で不在となる我が家においては、私は幼い弟の面倒をみるため市内に残り、小学校二年間の学業

を放棄せねばならなかった。しかし空襲で戦場と変わらぬ戦火に苦しむ大人に混じって、十歳そこそこの少年が幼児を育てる経験と戦争の悲惨を体験する人生を、授業にかえて学習したのである。それは戦後の混乱期にも苦難に耐えうる強い人間に私を成長させていた。戦争は極限の罪悪である。戦争は人を狂気にするがアメリカ兵はもつと残酷で野蛮な戦場行動があり、それが戦争であり、戦場心理という異常行為をさせるのである。誰をも責めることはできない。戦争とは大量虐殺であり、つまりは人殺しなのであるから。

終戦

あれは昭和二十年であった。度重なる大空襲で大阪だけでなく、名古屋・東京・神戸など大都会の民家は総猥めに焼け野原になった。次に狙われるのは大都市である。

八月六日、広島に特殊爆弾が投下された。ピカドンとも呼ばれた。それが原子爆弾と知るのは後日である。被害の大きさと異常さは隠す術もなく、大阪近隣にも全身に包帯を巻いたミイラの姿で広島から逃れてきた人々が少なくなかった。

元氣そうに見えた包帯姿の人々は、急にバタバタ倒れ、亡くなっていった。夏の明るい日差しに、頭部から顔面まで覆った真っ白い包帯が目まぶしかった。元氣に現地の被害を語っていた人が、突然急激に容体が悪化する姿に放射能被爆の恐ろしさを実見した。

三日後、長崎に再びピカドンが投下され、そして八月十五日、ラジオの終戦玉音・いや敗戦勅語を天皇陛下のお声で聞いた。私には雑音混じりで理解できなかったが、周囲の大人には泣き出す者もあり、戦争は終わった、もう空襲は無いと説明する人にも虚脱感が見られた。十歳の少年は、この夏の日々を強烈な太陽光の暑さと共に鮮明に記憶している。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃の開戦の日、そして四年後の八月十五日終戦の日を心に留め、記憶する者は少ない。思えば、よくもあの強大なアメリカや世界の大国を敵として四年間も戦ったものだと感心すらする。戦後の混乱も知らず、豊かで平和な日々をだからだと漫然と過ごしてきた人々とは、人生体験の価値が異なる。人生百年時代に突入したが、私は二百年も生きたかのように感じる。私は幸せだった。

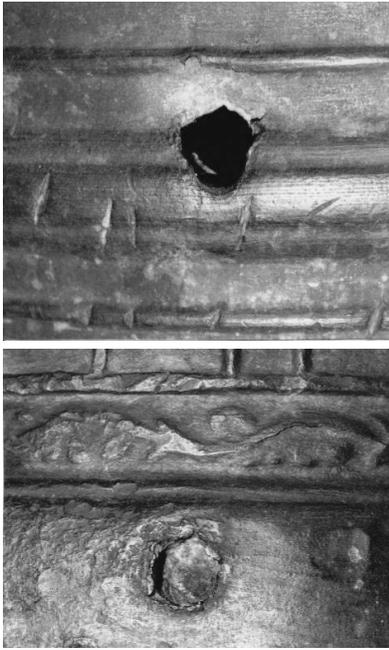


(余録) 艦載機の銃弾と半鐘

大東亜戦争末期になると、どこから飛来するのかわからずとかグラマン・ロッキードなどと呼んで警戒した快速の戦闘機が不意に急降下をしては地上に近付き、人でも車両でも干してある洗濯物まで、動くものはないんでも無差別に機銃掃射をして、また舞い上がって行った。時には敵パイロットの顔が一瞬見えるくらいまで接近することもあり、恐ろしい瞬間である。機影を見て機種を言い当てる遊びもあった。

敵機襲来の警報は主にサイレンであったが、地元消防団が町内の火の見櫓の半鐘をサイレンに合わせて連打してくれ、心強かった。空襲の時、人も居ないのに鐘の音が高らかに鳴ったことがあった。不思議に思い、後で調べたら艦載機の銃弾が二発命中しており、一発は貫通・もう一発は内側で止まっていた。鐘を鳴らしたのは艦載機の銃弾であった。現在この鐘は敗戦記念品として、私が大切に保管している。

昭和二十年、大阪は銃後ではなく、戦場であった。そして私は、その戦場の真ただ中に居た、数少ない語り部の一人となった。



↑被弾半鐘「半生？」重傷を受けながら、良い音色で高らかに鳴り響きます。高さ53cm・直径30cm。とても重い。

(猪飼野探訪会)

2021-08-15 大阪 日 日

「戦後76年 後世へ紡ぐ記憶」

「戦末期の大阪は銃後ではなく戦場の真ただ中に居た。数少ない語り部の一人となった。」

■自宅も戦場に 戦争時、澤田さんの住みは生野区内にあった。空襲の被害を受けた。戦時中、自宅も戦場に。戦争時、澤田さんの住みは生野区内にあった。空襲の被害を受けた。戦時中、自宅も戦場に。

澤田平さん(86) 大阪市東成区

戦争に正義などない」と平和への思いを語る澤田さん—大阪市東成区

戦争に正義などない」と平和への思いを語る澤田さん—大阪市東成区

戦争に正義などない」と平和への思いを語る澤田さん—大阪市東成区